動作を含む否定的なフィードバックに対する反応の測定法開発

パーソナルスペース侵入時において

○高木 紋¹・田中 恒彦²(新潟大学¹・新潟大学²)

キーワード: パーソナルスペース, ソーシャルスキル

Development of measurement method for negative feedback including motion. - In the case of personal space intrusion -

Aya Takagi¹ and Tsunehiko Tanaka²(Niigata University¹, Niigata University²)

Key Words: Personal Space, Social skill

目的

他者に侵入されると情緒的に反応してしまう領域のことをパーソナルスペース（以下P Sと表記する）と呼ぶ。対人関係の距離における要因で、対人関係の指標、発展、維持、そして傾向を示すもの（本間, 1999）と定義されている。P Sに侵入されると強く否定的な情動が喚起されること

（Sommer, 1959）から我々は相手のP Sに侵入しないよう配慮しているが、中にはP Sに侵入してしまう者もいる。本研究では対人戦略的にP Sに侵入する者を戦略的侵入傾向とし、また相手のP Sに気付かずに入ってしまう者を誤認識的侵入傾向と仮定した。P S侵入傾向を戦略的侵入傾向、誤認識的侵入傾向と適正修正傾向の3つに分類し、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（相川・藤田, 2004）との関連の検討を目的とした。表情認知得点によりソーシャルスキル得点に差異が生じること、行動修正の頻度によって自発的接近行動回数に差異が生じること、侵入傾向によりソーシャルスキル得点に差異が生じることを仮説として立てた。

方法

縁故法により募った20歳以上の男性22名のうち、日本語版自閉症スペクトラム指数（若林・東條・Simon・Sally, 2004）で33点以上の1名を除いた21名（平均年齢21.86歳、標準偏差0.91）を実験対象者とした。

表情認知課題は、相手が表出した非言語情報フィードバックを正しく受け取ることが可能であるかを判別するために用い、表情認知得点の平均値から1標準偏差以下を誤答者として扱った。表情刺激にはJACFEE（Matsumoto & Ekman, 1988）の刺激セットのうち怒り、軽蔑、嫌悪、喜び表情の女性に限定した4種類を使用した。コンピュータ画面中央に注視点を150ms呈示し、注視点の呈示終了後に表情画像を画面中央に300ms呈示した。表情画像の呈示終了後、画面に4種の感情語（軽蔑、怒り、悲しみ、笑顔）が呈示され、実験参加者は呈示されていた表情画像がいずれの感情を表していたかキーボードで反応した。これを1試行とし、4表情それぞれ4回の繰り返しを伴う合計16試行を実施した。

観察実験は、実験協力者（サクラ）の回避行動に対して行われる実験参加者の行動修正を観察するために用いた。実験協力者（女性, 21歳）と実験参加者で絵しりとり課題を行い、課題遂行に伴う接近行動に応じてサクラが回避行動を行った。十分な接近が誘発されない場合においても回避行動を呈示できるよう、参加者が用紙の中央からサクラ側の領域に書き込む際は必ず回避行動を行った。回避行動の呈示後に生じた対人距離の変化、および誘発的接近行動以外の自発的接近行動が減少・消失が生じるかを基準として行動修正の有無を判断した。心理学を専攻する大学院生2名で自発的接近行動回数のカウントと行動修正の有無を判断した。

表情認知課題に正答した上で行動修正を行う者を適正修正傾向、表情認知課題に正答した上で行動修正を行わない者を戦

略的侵入傾向、表情認知課題に誤答した上で行動修正を行わない者を誤認識的侵入傾向として分類した。

結果

侵入傾向の分類を行った結果、戦略的侵入傾向が10名、誤認識的侵入傾向が3名、適正侵入傾向が8名となった。

表情認知得点とソーシャルスキル得点とで無相関検定を行った結果、表情認知得点とソーシャルスキルの2つの母集団データには有意な相関関係は認められなかった（ $r = -.12$, $p = .60$ ）。またソーシャルスキルの下位尺度である解読得点との相関も同じく検討した結果、相関は見られなかった（ $r = .23$, $p = .31$ ）。

行動修正の有無で群分けを行い、接近行動回数を従属変数とした対応のないt検定を行った結果、行動修正による接近行動回数の平均値に有意な差（ $t(12) = 1.21$, $p = .25$ ）は見られなかった。

侵入傾向（戦略的侵入傾向・誤認識的侵入傾向・適正修正傾向）を独立変数、ソーシャルスキル得点を従属変数とした1要因3水準の参加者内計分散分析を行った結果、侵入傾向（ $F(2, 18) = 0.74$, $p = .49$ ）による効果は見られなかった。さらに下位尺度である解読スキルと関係維持スキルそれぞれとの関連を検討するためそれぞれを従属変数とした1要因3水準の参加者内分散分析を行った結果主効果、交互作用とも有意な差は確認できなかった。

行動修正の有無を独立変数、ソーシャルスキル得点を従属変数とした対応のないt検定を行った結果行動修正の有無によるソーシャルスキル得点の平均値差（ $t(19) = 0.44$, $p = .67$ ）は認められなかった。下位尺度である解読得点と関係維持得点のそれぞれを従属変数として同じく対応のないt検定を行った結果、行動修正の有無による両群の平均値差は解読スキルにおいても（ $t(13) = 0.37$, $p = .72$ ）関係維持スキルにおいても（ $t(10) = 0.95$, $p = .36$ ）認められなかった

（ $t(10) = 0.95$, $p = .36$ ）。

考察

分析の結果、本研究の測定法により分類した侵入傾向とソーシャルスキルとの関連は見られなかった。以下に問題点を3つ挙げた。“対人戦略的”という性質が測定不可能な手続きであったことが挙げられる。侵入傾向を分類する際、行動修正の有無を基準としたが行動の意図が相手への配慮か自己のP Sを防衛するであるかを判断できなかった。この点については実験参加者へのインタビューでより詳細な検討が可能である。行動修正を行っていることから表出されたネガティブ・フィードバックを受け取ることが可能であると考えられるが、受け取ることが可能であるかの判断基準とした表情認知課題には誤答している者がいた。これは同じノンバーバルな刺激とはいえ今回扱ったフィードバックとは質が異なるため、判別に適していなかったことが考えられる。